# ヴィルヘルム・ベルシェとゲルハルト・ハウプトマン

鈴木　将史

「会をお開きにする前に、私が最後のご挨拶を申し上げるべく立ちましたのは、ひとえに君に対する変わることのない衷心よりの気持ちを、この晴れがましい席で口にしないわけにはいかぬからであります。その大部分を仕事に費やした７０年間が過ぎ去りました。ドイツ文化、そして人類文化に捧げられた仕事です。この間君は、地道に粘り強く働き続け、その成果に対して国民から感謝を得るに至ったのであります。正に真の自由な国民教師として、君は何十万、いや何百万ものドイツ人を、老若男女、地位を問わず教え諭し、彼等に自然の中における神の摂理や、また神の中における自然の摂理を解き明かしたのです。君は我が国の国民に、我が国の詩人や思想家や学者の業績を幾度となく紹介し、ために各方面から等しく感謝の念を勝ち得たのです。自然と自然を扱う学問への興味は、とりわけ我が国にあっては少なからぬ部分が君一人により喚起され、育まれ、そして朽ちることなく保たれ続けたのです。」[1]

上の文章は、１９３１年１月２日にシュレジエンのシュライバーハウで催されたヴィルヘルム・ベルシェ７０歳誕生記念パーティーの席でゲルハルト・ハウプトマンが述べた祝辞の一部である。「ゲーテの再来」と謳われたハウプトマンは２０世紀初頭からナチスの政権獲得までドイツ文壇の頂点に立ち続け、当然の如く広い交友関係を誇ったが、その人脈は芸術家、研究者、政治家、実業家、ジャーナリストなど多岐に亙っている。従って、そうした友人達について語った文章も彼の著作中には散見されるものの、大半は新聞や雑誌に掲載されたものであり、彼が挨拶としてその場で語ったケースは思いの外少ない。ハウプトマンの講演、挨拶等の過半は１９１２年から１９４２年までの間に行われており、１２年、２２年、３２年と１０年ごとに大規模になる誕生祭の折に、講演・挨拶等が集中する傾向が見られる。ハウプトマンの年譜は、遺稿の整理が進んだ結果、現代ではかなり詳細な部分まで明らかになっているが、その年譜で確認された彼の講演、あるいは本人が行った正式な挨拶は、延べ８４回に上る(ラジオによる講演は除く)[2]。しかしこの数も、「国民的詩人」としての彼の地位と６０年に亙るその執筆活動を省みると、決して多いものとはいえない。ハウプトマンの正式な講演録としては、詩人が存命中の１９３２年に „Um Volk und Geist“という題のもとに発行され、その後内容を補充して４２年発行の「決定版全集」(„Ausgabe letzter Hand“)に収録されたものが唯一であるが、４２年以降、特に８０歳の誕生日（42.11.15.）を迎えてからのハウプトマンは、講演活動を全く行わなくなり、式典への出席も極めて稀になったため[3]、この講演録に収められた５６編が、生前の彼が人前で述べた言葉の輪郭を形成しているといえよう(４２年の誕生祭での挨拶など、この講演録に収録されなかった若干の挨拶は、６２年から刊行が開始された「生誕１００周年記念全集」[„Centenar - Ausgabe“]に補遺として収められた)。

人前での話を決して得意とはしなかったというハウプトマンの特徴を、これらの数字は如実

に物語っているのだが[4]、わけても同時代人への挨拶は、„Um Volk und Geist“ には７編しか収録されておらず、その内６編は故人への弔辞となっている(W.ライスチコフ、O.ブラーム、P.シュレンター、R.デーメル、W.ラーテナウ、O.レルケ。ただし、ラーテナウに対する帝国議会での弔辞は、妻マルガレーテの病気のため実現せず、レルケへの弔辞は故人の棺を前にして述べられたわけではなく、„Neue Rundschau“ に発表された)[5]。補遺にも個人に対する弔辞・祝辞は３９編収められているが、本人を前にして述べられたものはわずか２編に過ぎない。それも、その１編は１９２６年に来独したフランス人作家トリスタン・ベルナールを迎えての晩餐会でなされたもので、多分に儀礼的性格が強く、もう１編は四男ベンベヌートの婚礼の席での祝辞という、逆に極めて私的な挨拶であり、両者共に例外的な事例と考えられる[6]。従って、目前の友人に向けられたハウプトマンの挨拶は、上に紹介したベルシェに対するもの唯１編ということになるのである。

このベルシェに贈られたハウプトマンの特例ともいえる挨拶は、彼の築いた人脈におけるベルシェの特異な存在をまた物語るものである。ヒルデブラントとクチンスキは、『ハウプトマンとその同志達』の序文の中で、詩人と親しい間柄にあった人間達を４種類に大別した。即ち第一のグループには、ハウプトマンの初期時代である自然主義およびそれに続く時代に彼と親交を結び、その文学的成功を間近で見守ったO.ブラーム、P.シュレンター、S.フィッシャー等が属し、世紀転換期に詩人と知り合ったA.ケルやM.ラインハルト等が第二のグループを形成し、両大戦間に詩人と親しくなり、その文学研究の基盤構築に多大な寄与をもたらしたC.F.W.ベールやF.A.フォイクト、M.ピンクスといった第三のグループに続いて、第四のグループは第二次世界大戦時あたりから登場し、詩人と直接交流することによりハウプトマン研究の中枢に位置した研究者達である[7]。この例に倣えば、ベルシェは疑いもなく第一のグループに属することになるが、ブラームやシュレンターやフィッシャーが１８８９年旗揚げの会員制演劇鑑賞会„Freie Bühne“ を契機として詩人の友人となったのに対し、ベルシェは１８８６年に結成された自然主義文学研究会 „Durch!“を通じてハウプトマンと知り合っているため、詩人にとってはブラームやシュレンターより更に古い、いわば「第０のグループ」に属しているといえるだろう。また、第一のグループとハウプトマンとの交流は、当人達の死亡により第一次世界大戦前にあらかた終了しているが（ライスチコフ 1908 年、ブラーム 1912 年、シュレンター1916 年、フィッシャーのみ 1934 年まで世にあり、詩人と交流を続けた)、ベルシェは１９３９年まで生存した。ハウプトマンとの交流年数からいえば、ベルシェが半世紀をも越えて最も長く詩人と付き合った人物であることは間違いない。

また、ここでベルシェを「第０のグループ」に分類するのは、単に知り合った年代の古さからだけではない。第一のグループと面識を持ったハウプトマンは、既にベルリン・シャルロッテンブルクに居を移していたが、ベルシェは、ベルリン郊外エルクナーに住むハウプトマンと最初の知遇を得ているのである。病弱であった青年期のハウプトマンは、療養の目的でベルリン東部郊外のエルクナーに１８８５年に転居したが、自然に囲まれた当地は彼に豊かな文学的インスピレーションを与え、„Fasching“、„Der rote Hahn“、 „Bahnwärter Thiel“、そして

„Herbert Engelmann“など、後の様々なハウプトマン作品の舞台となった場所である[8]。とはいえ、エルクナーがハウプトマンにとって理想的なユートピアであったわけでは決してない。大都市ベルリンが持ち合わせる負の一面も、エルクナーには影を落としていたのである。

「私は当時ベルリン近郊という制約を受けた悲しくも大いなる幻影の中に住んでいた。（中略）３ドイツマイル離れた都市からは、何という不幸が川辺へと打ち寄せられたことだろう！ここエルクナーだけでもズボン姿や衣服を纏った姿で蝿のたかった死体が発見されない夏はなかった。大抵自殺者である。いわば、ベルリンという恐ろしい生者と死者が、悪夢のように私にまとわりついて離れなかったのである。」[9]

ハウプトマンに文学的インスピレーションを与えたものは、自然が手付かずのまま残る牧歌的なエルクナーの環境よりも、その地に暮らす人々との直接的な交流だった。

「私は名もなき人々と知り合いになった。山番、漁師、掘立小屋の家族、線路番などである。病院の付添婦を、まるで彼女が笏と王冠の担い手であるかのように念入りに、愛着を持って観察した。（中略）私は近くの化学工場の工員たちと彼らの悩み、喜び、望みについて語り合い、まさにベルリンから至近にありながら人気もまばらなこの集落で、５００年以上もの間変わらず保たれてきた人間の本質を見出したのだった。」[10]

エルクナーに滞在した 4 年間で、ハウプトマンが発表した文学作品は„Fasching“(この小説が1887年に発表された雑誌„Siegfried“は同人誌に近いものであって、詩人自らがその存在を忘れていたほどである。現在はドイツ国内でも閲覧は非常に困難な「幻の雑誌」となっている)と„Bahnwärter Thiel“のみに留まっているが、妻マリーの財産を頼りに、物質的には何にも束縛されない時間を過ごせたハウプトマンにとって、この 4 年間は格好の充電期間となったのである。また、この時期にベルリンの自然主義研究会„Durch!“との接触があったことも見逃せない。即ち、ハウプトマンが文字通り自然主義の実体を知ったのはエルクナー時代であって、それ以前に書かれた完成作„German und Römer“や„Promethidenlos“と „Fasching“及び„Bahnwärter Thiel“を比較してみれば、古代文学エピゴーネンの域から全く抜け出ていない前二者と、既に「徹底写実主義」の技法を十分消化している後二者との差は歴然としている。一方、この間彼は常に吐血の不安に襲われ、途中３ヶ月両親宅に暮らしたハンブルクでは（1886.11.～1887.1.）長男の病気も加わり、精神的には決して平穏な期間とはいえなかった。しかし、「芸術家としての衝動は、いうなれば生命そのものであった」[11]ハウプトマンにとり、生への執着は文学への傾倒に他ならなかったのである。従って、「(筆者註：エルクナーでの)4年間は、私の作品にとっての 4 個の礎石となった」[12]とハウプトマンが認めるように、エルクナー時代は、初期ハウプトマン文学の根幹を形成した時期として特筆されるべきもので、自らが病苦に苛まれ、周囲の窮乏を目の当たりにしながら、その昇華的行動として文学的情念を滾(たぎ)ら

せた時期といえよう[13]。

こうした、ある意味生涯で最も充実したとさえいえる時期に、ハウプトマンとベルシェは出会い(正確には、ベルシェが幼馴染みのルドルフ・レンツ[14]の仲介でハウプトマンを訪れ)、詩人は„Jesus-Studien"を彼に読み聞かせたり(1889.4.10.)、„Vor Sonnenaufgang"の発行計画について話し合ったり(1889.6.11.)、共に近くの丘へとハイキングを楽しんだりと、Friedichshagenerkreis(FHK)的な交流を二人はこの時期に行うが、それは正に文学青年同士の無垢な親交であり、„Vor Sonnenaufgang"で一躍文壇の寵児となったハウプトマンが後に繰り広げる交際とは次元を違えた素朴なものといえよう。こうした無名時代に知り合った作家同士の関係は、両者の文名が上がるにつれて微妙な変化を見せていくことが常であるが（ハウプトマンでいえば、やはりエルクナー時代に知り合ったA. ホルツとの関係が挙げられる)、ベルシェと詩人の親交は、(他の交流と比較して、殊更濃密になることもなかったが)生涯に亙ってさしたる変化を見せてはいない。こうした両者の安定した関係は、両者に共通の利害が存在しなかったことも大きく関係していようが、また、ベルシェの温厚な性格も少なからず寄与しているものと思われる。

ヴィルヘルム・ベルシェ(Wilhelm Bölsche)は１８６１年１月２日にケルンに生まれた。父カールは「ケルン新聞」の文芸欄編集者であり、後のベルシェと同様、自然科学と文学に深い興味を抱いていたため、その家は自然科学者や文学者が頻繁に出入りする一種のサロンを形成していた。文学者としては、K. F. グツコウ、G. フライターク、B. アウエルバッハ等と親交を深めたが、とりわけ注目すべきは、フォンターネとの交流である。フォンターネは、カールのサロンに属する作家ではなかったが、彼の„Der Krieg gegen Frankreich"をカールが文芸欄で取り上げたことを契機に両者の交流は始まり、後には息子もしばしばフォンターネを論評し作家と手紙をやり取りしている[15]。ベルシェは以上の如く、自然及び人文科学に関心を抱くには理想的な環境で育ったわけだが、事実ギムナジウム時代より自然科学エッセイを雑誌に投稿し始め、哲学と考古学を専攻した(修了せず)ボン大学時代には父の斡旋によりケルン新聞に論評を執筆している(但し、父の筆名を使用)[16]。最終的には自然科学啓蒙作家として一家を成すことになるベルシェだが、自然科学分野においては生涯独学者であった。そうした作家志望の息子に父カールは多大な理解を示し、その死(1891)まで経済的援助を続け、８０年代半ばには、息子のイタリア旅行並びにパリ滞在を支援している。即ち、ベルシェの文筆家としての修養と成功は、父の存在なくしてはほぼ不可能であったといえるだろう。１年ほどのパリ滞在を終えたベルシェはいよいよベルリンに出てくるのだが[17]、１８８７年から彼の本格的な仕事が開始される。それ以前には、イタリアとパリで構想された小説(„Paulus"[1885]、„Der Zauber des Königs Arpus" [1887])が既に発表されていたが、どちらもローマ時代を舞台とした歴史小説で、心理描写やテーマに近代文学的な息吹が感じられるものの、さしたる注目を浴びることなく忘れ去られている。しかし、１８８７年に発表された『文学の自然科学的基盤』(„Die naturwissenschaftlichen Grundlagen der Poesie")は、ドイツ自然主義文学を語る上では欠かすことのできない理論書として、現在も尚その価値を失ってはいない[18]。この書の要旨は、１

８８７年３月１８日に „Durch!“でベルシェ自身がゲストとして発表し、好評のうちに活発な議論を呼んだのだが、その３ヵ月後の６月１７日に、同じ会でハウプトマンがやはりゲストの立場でビュヒナーの『レンツ』と『ダントンの死』について研究発表を行い、喝采を受けた状況と酷似している[19]。結局ベルシェはハイネ研究を経て１８９１年に長編小説 „Die Mittagsgöttin“を著したところで文学的創作に一応の見切りをつけ[20]、以降は自然科学、それもダーウィンの進化論とヘッケルの一元論を織り込んだ自然科学啓蒙書を執筆することにより、斯界の第一人者として大衆的人気を博することとなる。

本論の焦点はベルシェとハウプトマンの関係であるが、二人が知り合った頃は、双方にとって等しく重要な時期となる１８８６年から８７年にかけてであった。正確な日付は資料に残されてはいないものの、ベルシェの無二の親友であり文学的同士であったブルーノ・ヴィレ(Bruno Wille)の証言によると、彼が最初に„Durch!“の例会場であるベルリン旧市街の居酒屋を訪れた際、隣の席を占めていた若者がハウプトマンであった[21]。『年譜』ではこの出来事を１８８７年１月９日から２１日の間としているが、その根拠は不明である。また同じくヴィレによると、その後彼はレンツの紹介でベルシェと知り合い、彼を„Durch!“に紹介したとしている[22]。この記述はベルシェの回想とも概ね符合しているため、１８８６年５月６日に結成された „Durch!“への出席は、明らかにハウプトマンが先であったといえる。そしてベルシェが同会を訪れた時には、(めぼしい作品はまだ何も発表していなかったにも拘らず)ハウプトマンは既に同会で注目を浴びる存在であったことが、ベルシェの以下の記述から窺えよう。

> 「とうとう何かの折にレンツが私に向かってこう言った。『君は郊外のエルクナーに住んでいるある若者に会わなきゃいかんぜ。金持ちで誰の世話にもならず情熱に任せて生きている男だが、情熱といっても本当に気高い情熱だ。彼自身文学も書くんだが、日曜となると森の小奇麗な自宅に友人を集めてしゃれた芸術論を交わすんだ。あそこは食い物はうまいんだが、飲み物はそれに較べてひどい。というのも、いつの頃からは知らないが、あの男は酒を止めちまったからな。まあ一緒に行ってみようぜ。損はしないって。ハウプトマンという男なんだ。』そして確かに損はしなかった。」[23]

この文章から類推すると、ベルシェがハウプトマンと初めて会った場所はエルクナーのハウプトマン邸ということになるが、『年譜』では１８８６年８月乃至９月にベルシェとヴィレがエルクナーのハウプトマン邸を訪ねたとあり、その後先述したとおり、１８８７年１月９日から２１日の間に„Durch!“で詩人がヴィレと「初対面」したとある[24]。この記述自体が明らかに矛盾しているが、ハウプトマンが訪ねた„Durch!“の主要メンバーにベルシェが既に加えられているのも正しくはない。何故なら、„Durch!“例会のプロトコルが幸いにも１８８７年分に関しては現存しているのだが、それによると、同年のベルシェは３月１８日と７月２２日に出席したのみの「客分」扱いだったからである(ヴィレはほとんど毎回出席し、プロトコルも取った主要メンバーであった)。従って、ベルシェとヴィレの証言及びハウプトマンの『年譜』及び„Durch!“の

プロトコルを総合すると、ベルシェ、ヴィレ、ハウプトマンそしてレンツ(彼は前三者の出会いを取り持った意味で重要な人物である)の出会いは以下のようにまとめることができよう。即ち、８６年５月に結成された„Durch!"にハウプトマンは遅くとも同年夏までには足を運び、ヴィレはそれより少し遅れて、しかし秋までのうちに初めて会合を訪れた。ベルシェは８６年には既にパリからベルリンに移ってきていたが、暫くは若手文学者達と何のコンタクトも持たなかった。そうした８６年の秋に彼は旧友のレンツと偶然再会する。レンツの自宅でベルシェは更にヴィレを紹介されるが、この時期は早くとも８６年秋以降と考えられる。ヴィレとレンツはベルシェをほどなく„Durch!"へ案内する。つまり、ベルシェとレンツの再会、ベルシェとヴィレの対面、ベルシェの„Durch!"初訪問は短期間のうちに連続した出来事であろう。ベルシェの„Durch!" 初訪問の際にハウプトマンは出席していなかったが、レンツに誘われ直にベルシェはエルクナーのハウプトマン邸を訪れる。訪問時期は秋か春であろう。何故なら、ベルシェはエルクナーの自然に最初から魅せられ、それがゆくゆくは彼にフリードリヒスハーゲン移住を決断させる一背景となるのだが、対して同地の冬は長く厳しく、それに耐えかねたハウプトマンは８６年１１月から８７年１月始めまで両親の住むハンブルクに避難したほどだからである[25]。従ってベルシェがハウプトマンと初めて会ったのは、８６年秋か８７年春ということになるわけだが(夏は論外である。86 年夏では„Durch!"結成直後となり、時間的余裕がなくなるし、87 年夏ではハウプトマンが„Durch!"で発表した時点でも両者は会っていないという、考えにくい状況になる)、８７年春と想定すると、ベルシェはハウプトマンに会うことなく 3 月に„Durch!"で発表したことになるため、これもやや不自然である。やはり８６年秋に両者が初めて会ったとするのが、最も無理の少ない想定であろう[26]。

以降、両者の関係は親密となり、１８９０年まで、即ちハウプトマンがエルクナーを離れるまで最も頻繁に交流した友人がベルシェであった(その際には、ヴィレも必ずといっていいほど同席している)。特筆すべきは、しばしば詩人がベルシェの前で完成前の自作を朗読していたことで、彼は„Jesus-Studien"[27] や„Vor Sonnenaufgang"の最初の読者となり[28]、あるいはおそらく„Bahnwärter Thiel"も出版の 1 年程前にベルシェの前で披露されていた筈である。(ヴィレは回想記に„Durch!"結成一周年記念祭[1887.5.8.]を記述しており、それによると、„Durch!"会員の一行はエルクナーへとハイキングを行い、午後にはハウプトマン邸に立ち寄っている。そこで„Bahnwärter Thiel"が朗読されたのだが、ベルシェは言及されておらず、彼がこの記念祭に参加していたかどうかは、他の資料でも確認されていない。だが、参加者が約３０人もの大人数であったことや、当時ヴィレはことごとくベルシェと行動を共にしていたことを勘案すると、その場にベルシェも同席していた可能性は非常に高い[29]。) 従って、１８９０年の時点では、ハウプトマン文学に最も深く接していた人物の一人がベルシェであったといえる。彼が„Vor Sonnenaufgang"初演 1 週間前という最初期に論評を雑誌に発表したことや[30]、自然主義文学の旗手となったハウプトマンに対して創刊間もない„Moderne Dichtung"が１８９０年に特集を組んだ際、詩人の紹介文をベルシェが担当したこと[31]なども、ハウプトマン通としてのベルシェの存在を裏付けるものだろう。

ベルシェとハウプトマンの親密な交際は、„Vor Sonnenaufgang“の大成功によりハウプトマンが一躍「時の人」となったことで１８９０年初頭にエルクナーからベルリン西部のシャルロッテンブルクへ転居し、同じ時期には逆にベルシェとヴィレがベルリンから東部郊外でエルクナーに隣接するフリードリヒスハーゲンへと転居することにより、ひとつの区切りを迎える。一方は FHK の、そして他方はベルリン新進文壇の中心的人物として社交範囲が急速に広がったため、それまでのような頻繁な付き合いは(特にハウプトマンにとって)難しくなったのである。とはいえ、共に過ごす時間は減ったものの、両者の関係が変質したわけではない。自然科学啓蒙作家であるベルシェと、劇作家・小説家であるハウプトマンの利害は終世重なることがなく、その点からも両者は双方の立場に影響されない「素朴」な友情を結び得たといえよう。逆にいえば、両者の関係が双方の著作に与えた影響も多くはなかった。ベルシェは自分がハウプトマンに与えた影響を折りに触れ否定している[32]。

両者はしかしその後も私生活において深い交流を続け、ハウプトマンの第二の妻となるマルガレーテ・マーシャルクが兄マックス(1863-1940：作曲家。ハウプトマンの友人)に連れられて１８８９年８月２５日に詩人を初めて訪れた際も、ベルシェ夫妻が同席していた[33]。マルガレーテとハウプトマンは１８９３年の暮れから急速に接近し、９４年１月にハウプトマンはマルガレーテと過ごすための部屋を借りるまでになる。その直後に妻マリーは子供を連れてアメリカへと旅立ち、フランス旅行中であったハウプトマンは急遽旅程を切り上げ妻を追いアメリカへと向かう。そのアメリカからベルシェに宛てられた詩人の手紙が残されているが、手紙の目的は友人に対する「口止め」である。

> 「君が或る女性(原文„Dume“)の名前を知る唯一の人間であるのだから重ねてくれぐれも頼みたいのだが、約束してくれたように、どんな親密な場所であってもその名を一切口に出さずにおいて欲しいのだ。」[34]

前年の１２月にハウプトマンがベルシェの許を訪れたことは明らかになっているが[35]、その際に詩人の目下の葛藤が吐露されたのあろうか。「或る女性の名前」が「マルガレーテ」であることは明白だが、その名を知り得る特別な立場に当時のベルシェが立っていたことは疑いがない。

ベルシェとヴィレが移り住んだフリードリヒスハーゲンは、エルクナー同様自然に囲まれたミュッゲル湖畔の集落であった。ベルリンの薄暗い居酒屋で連日の如く講演活動を行い糊口を凌いできた二人は、都会生活に嫌気が差し、折りしもフリードリヒスハーゲンに住む知人の M. シッペル[36]から当地の話を聞き、それまでしばしば訪ねていたエルクナーの印象も後押しをして移住を決意するに至る。ただその際、移住先のベルリン東部がベルシェ達にとり特別な意味を持つことを忘れてはならない。

> 「W(筆者註：ベルリン西部)は美術的な話題が活発に交わされるエレガントな世界だが、O(同：ベルリン東部)は社会の動向に翻弄される労働者たちが住んでいた。ベルリン東

部の郊外は、また社会的な色合いが西部とはまったく異なっていた。（中略）芸術的な脈動をまだはっきりと感じていなかったヴィレは、募るエネルギーを社会的意味での政治問題へと差し向けた。一方私の中には（実際私の人生が常に二つの愛着、つまり自然探求と文学の間を行きつ戻りつしてきたように）私たちの時代が成し遂げた自然科学での業績を一般に周知させたいという欲求が、またもやむくむくと湧き上がってきたのだった。（中略）田舎へ！森へ！」[37]

こうしてベルシェはヴィレと共に１８９０年にフリードリヒスハーゲンへと移り住む[38]。翌年には、当時の若手文学者達のリーダー的存在であったハルト兄弟も移り住み、フリードリヒスハーゲンは、ほぼ１８９３年までドイツ文学史にも珍しい一大文学サークルの場を提供するのである[39]。ハウプトマンも１８９０年の４月から７月にかけて一旦エルクナーに立ち戻り、サークルの文学者と交流を重ねる[40]。以降、ベルシェとハウプトマンの軌跡は異なる進路を取るが、ここではベルシェに焦点を絞って、彼の足跡を手短に辿りたい。

文学的には孤高を保ったハウプトマンとは対照的に、ベルシェは常に仲間を求め、集団を好む傾向があった。同様の傾向をやはり強く有していたヴィレとベルシェは殊の外うまが合ったわけだが、更にヴィレは様々な会の設立に意欲を燃やし、それらのことごとくにベルシェが参加するという構図になった。即ち、二人がフリードリヒスハーゲンに移住した１８９０年に、ヴィレは新たな倫理観を追求する„Ethischer Klub“を設立し、文学面では、前年設立された„Freie Bühne“(FB)が教養あるブルジョア層を主な会員としている実態の改善を目指し、真の民衆つまり労働者階級を文化的に啓蒙する演劇鑑賞会として、„Freie Volksbühne“(FVB)を立ち上げ(1890年7月29日)、そのいずれにもベルシェは参加するのである(また、ヴィレが設立したわけではないが、同じく１８９０年に結成され、講演活動を柱とした文学会„Freie literarische Gesellschaft“の設立者にも、ベルシェは名を連ねている)。FVBは、FBが主に外国(北欧・ロシア)作品をレパートリーとしたのに対し、自国作品をレパートリーの主力に据え、文学者のみならず社会主義活動家も数多く指導部に取り込んだ鑑賞会だったが、その結果ほどなく、会の運営を巡って活動家達と文学者達の間に亀裂が生じる(これは、1890年9月30日に「社会民主主義活動鎮圧法」が廃止されたことにより、活動家達に連帯の機運が薄れたことも大きく影響している[41])。そして設立から僅か２年後の１８９２年には、ヴィレがやはりベルシェを引き連れて、イデオロギー色の薄い„Neue Freie Volksbühne“(NFVB)を設立するのである(従来の„Freie Volksbühne“会長にはF. メーリンクが選ばれた)[42]。結局このNFVBはFB同様のプチブル的教養主義から脱却することができず、会の主旨が労働者を主とする会員達に充分浸透しないまま、加えて新たな「ハウプトマン」を発掘することもできず尻すぼみに終わる[43]。この間ベルシェの主たる仕事は、１８９０年１０月２９日よりブラームから引き継いだ週刊総合文芸誌„Freie Bühne“の編集作業だった。„Freie Bühne“は１８９２年より月刊となるが、それは発行人S. フィッシャーの意向が働いたもので、この転換をベルシェは「これにより、この雑誌が有していた軽いフットワークが失われた」[44]と嘆いている。彼は結局１８９３

年９月号を最後に編集から手を引き、スイスに旅立つ(彼の行動がいささか急であったことは、１０月号の編集をJ. ハルト、１１月号をヴィレが担当し、１２月号からようやく恒常的編集者としてO. J. ビーアバウムを迎えるところから窺うことができる。即ち、ベルシェの退任後、後任の編集者が決まるまで、フリードリヒスハーゲンの仲間達が「穴埋め」をしたのであろう)。この一件を機に、「松の息吹や湖の息遣いと密かに混ざり合った、何か快楽の花びらが漂っていたかのような」フリードリヒスハーゲングループの時代は終わりを告げる。また、ベルシェの文学への関わりも終わりを告げ、以降の彼は１９００年に一元論サークル„Giordano-Bruno-Bund"をヴィレと共に設立したりもするが、専ら大衆科学ジャーナリストとして独自の道を歩むことになる。特に１８９８年に出版した„Das Liebesleben in der Natur"は大成功を収め、他の著作も含めて、戦前ベルシェは最も読まれた著作家の一人となるのである。(この点や、後の行動に関して、ベルシェは画家フィードゥス[Fidus:1868－1948]と類似した面を持つ。彼の„Lichtgebet"も戦前の家庭では好んで飾られた絵画であり、彼自身、一元論を奉じFHKにも足繁く出入りしていた[45]。) ベルシェはFHKの中では最も長く１９１８年までフリードリヒスハーゲンに留まり、その後シュレジエンのシュライバーハウに移った。当地で彼は１９２３年に妻を、そして３５年に娘を病気で失いはするが、名誉市民に推されるほどの名士として穏やかな人生を送った後、１９３９年8月３１日にその生涯を閉じている。

ベルシェとハウプトマンは、この間も頻繁ではないものの安定した交流を続けた。ハウプトマンの日記中には、１９１１年を境にベルシェに関する記述がほとんど見られなくなるが(1911年8月5日にベルシェはヴィーゼンシュタイン[ハウプトマン邸]で講演し、同月27日にシュライバーハウでの会合で両者は会っている[46])、ハウプトマンがベルシェに宛てた書簡によると、以降も両者は著書の贈呈を始めとする書簡のやり取りを続け、折に触れて会っていた様子が見て取れる[47]。ベールはそうしたベルシェの訪問のひとつを記録しているが、話題はやはりフリードリヒスハーゲンの思い出へと立ち戻ることが常だったのであろう[48]。即ち、両者の友情は、フリードリヒスハーゲン時代以来、良くも悪くも質的な変化は見せなかったと考えられる。後のベルシェが、「ハウプトマンの人生観は１８８９年にはもう完結していた」[49]と断じた事実は、彼がフリードリヒスハーゲン時代以来、詩人への見方を全く変えなかったことを物語る(ただ、ハウプトマン文学の占める社会的立場の変化について、後年彼はやや皮肉を込めた„Los von Hauptmann?"という文章で冷静な分析を試みている[50])。そして、ベルシェをハウプトマンの特別の友人たらしめている外的な要因として、両者には幾つかの類似点を指摘することができるのである。

まず、当時の若手文学者達の中で、ベルシェとハウプトマンは珍しく経済的不安を抱くことなく著作活動に従事できたことが挙げられよう[51]。ベルシェが３０歳まで父親の経済的援助を受けたことは先述したが、ハウプトマンも２２歳という若さで資産家の娘と結婚し、„Vor Sonnenaufgang"でデビューするまでは妻の財産で生計を立てていたことは有名である。両者共、大学を終了することなく(ベルシェ：哲学・考古学、ハウプトマン：美術)、ほぼ同じ時期にイタリアに遊学し、帰国後その強い影響のもとにベルシェは小説„Paulus"を、ハウプトマン

は叙事詩„Promethidenlos“を創作している。著作が脚光を浴び出した時期もほぼ一致しており、ベルシェは„Grundlage der Poesie“を１８８７年に、ハウプトマンは„Bahnwärter Thiel“を１８８８年に発表した後、本格的な著作活動に入った。両者の作品は„Durch!“例会、或いは„Durch!“一周年記念祭で公刊前に披露されているため、両者共相手が執筆中の作品を事前に知っていた可能性が高い。また、１９世紀末ベルリンには実に様々な文学サークル、研究会、演劇鑑賞会が結成されているが、その中でも特筆すべき３グループが„Durch!“、„Friedrichshagenerkreis“、そして„Freie Bühne“であることは論を俟たない。その３グループすべてに積極的に関わった人物をあげるならば、両者と、他には当時ベルシェと一心同体であったヴィレと、ハルト兄弟の名が挙がるだけである。(ハルト兄弟はこうしたグループ結成ラッシュの「呼び水」役を果たしており、1880 年代前半には、既に彼等の周囲には若手芸術家達が集まり、所謂„Hartkreis“を形成した。１９世紀転換期を通じて、ハルト兄弟は最も多くの文学集団に参加している[52]。) „Durch!“には両者ともゲストとして(後、ベルシェは会員)しばしば参加し、FHK にとっては、ベルシェはその中心人物、ハウプトマンは欠くことのできないゲストであり、また FB に対しては、ベルシェは鑑賞会の会員ではないものの、機関誌編集長の重責を担い、ハウプトマンは会員そして契約作家として深く関わった。こうして見れば明らかになるように、その著作は結果的にほとんど関連を持たぬものの、両者が辿った文学遍歴の初期段階では、外面的に共通した部分が多いことは了解されよう。そしてその後の人生においても、両者が似通った態度を取る場面が見受けられるのである。それは戦争時に際してである。

ハウプトマンが第二次世界大戦前のドイツの国際連盟脱退やオーストリア併合に賛同の意を表し[53]、国外亡命はおろか、ナチス政権により「御用アカデミー」へと衣替えさせられた「プロシア芸術アカデミー」から脱会すらしなかった事実は有名である。その一方、彼が„Die Finsternisse“や„Atriden-Tetralogie“等により反戦、反ナチス政策の意志を抱いていたという報告も多くのハウプトマン研究者からなされ、彼の真意が奈辺にあったかは依然として謎を孕み続けている。しかしいずれにせよ、戦前には Th. マンから「民衆の王」[54]とまで誉めそやされた詩人の名誉が、ナチスに対する煮え切らない態度により戦後著しく失墜した感は否めない。対してベルシェも社会民主主義運動に手を染めていたとはいえ、自国の戦争に対して明確な反論を唱えることはなかった。むしろ、第一次世界大戦下(1915)に出版された科学エッセイ集„Von Wundern der Tiere“には、動物の世界を借りて戦意発揚を図ったと思しき章－„Der Kampf um den Maulwurf“、„Tiere als Schützen“、„Unterseeische Schiffangriffe durch Tiere“、„Aus der Flottenkunst der Tiere“などーが散見されることが指摘されている[55]。また、奇遇にも第二次世界大戦勃発の前日に世を去ったベルシェは、引き起こされた戦争について、幸か不幸か実際に発言する機会を持ちはしなかったが、おそらくナチスの政策に異議は唱えなかったであろう。なぜなら、進化論を奉じていた彼は、この理論を曲解した「民族衛生学」も否定しようとはせず、１９３０年にヘッケルと共に「ドイツ民族衛生学会」(„Deutsche Gesellschaft für Rassenhygiene“)に入会し、１９３４年にはナチスの基本理念にも賛同するか

らである[56]。従って、彼が戦後まで生き長らえたとしたら、「ナチス協力文化人」として指弾された可能性が高い。しかし、彼自身は国家主義を信奉せず、特定人物の英雄化を否定していたことをフォンターネに関連して述べている。即ち、ベルシェは幼い頃フォンターネの三大戦記(„Der Schleswig-Holsteinsche Krieg im Jahre 1864"、„Der deutsche Krieg von1866"、„Der Krieg gegen Frankreich 1870-1871")を読み作者を崇敬していたが、成長するにつれて、フォンターネを母国の栄光しか頭にない偏見に満ちた作家として反感を持つに至ったというのである。(この反感は、後年作家と直に接するようになり、その革新的な文学観に触れ大きな敬意に変わる[57]。)こうした独裁政権に対する「面従腹背」的な姿勢を両者は互いに理解し合い、またベルシェは勿論だが、ハウプトマンもダーウィニズム的世界観を多分に有し(青年時代の彼は、„Vor Sonnenaufgang"の社会改革論者ロート同様、非常な節制家で知られ、後にはベルシェと同じく「ドイツ民族衛生学会」に入会する)、ためにその友情には影が差すこともなく、終世両者の間には、世界観的な対立も存在しなかった。

「これまでの人生の内、幾度となくあれやこれやが君から僕の中へと注ぎ込み、幾度となく君に教えを受け、君の天賦の知恵で身を暖めることが僕には許されたのです。」[58]

確かに、ベルシェはハウプトマンの唯一無二ではないものの特別な友人だった。その友情は打算の入り込みようのない純粋なものだったが、逆にいえば両者が手を携えて事に当たったという例もない。論集„Weggefährten Gerhart Hauptmanns"にはベルシェについての文章は載せられていないが、友情関係のみにあったベルシェがハウプトマンの「同志」であったか否かは確かに意見の分かれるところであろう。更に、誕生記念パーティーの挨拶では上記の賛辞をベルシェに贈ったハウプトマンではあるが、彼が友人の仕事を事実高く評価していたかどうかは極めて疑わしい。１９１７年１０月８日のメモに、詩人はこう書き付けている。

「この上なく愚かな積極性は生を表し、この上なく賢明な消極性ー(つまり評論家)は常に死を表すのみなのだ。ーそして私は今日、あの人のいいベルシェを生として、またシュテルンハイムを死として想い起こした。」[59]

[1] Gerhart Hauptmann: Sämtliche Werke. Centenar - Ausgabe（以降 CA.と省略）VI, Frankfurt.a.M/Berlin, S.816.

[2] Vgl. C.F.W. Behl/ Felix A. Voigt (bearbeitet von Mechthild Pfeiffer-Voigt): Chronik von Gerhart Hauptmanns Leben und Schaffen, Würzburg 1993.／ Dies. : Nachtrag zur Chronik von Gerhart Hauptmanns Leben und Schaffen. Würzburg 2002.

[3] ハウプトマンの誕生年がゲーテの没年から丁度 30 年経ていることから、彼の誕生祭はゲーテ記念祭の意味合いをも強め、また詩人自らがこの巡り合わせを利用するかのように、自身のイメージをゲーテのそれに近づけていった。その相乗効果により、ハウプトマンの誕生祭は 10 年ごとに規模を拡大し、アメリカ訪問も加わった 70 歳誕生祭（1932）は、作家の誕生祭としては空前絶後の盛り上がりを見せる。ドイツ文壇の盟主としてのハウプトマンの地位はここに極まったかに見えたが、その直後に政権の座についたナチスのプロパガンダ役となることを潔しとしなかったため、政府は彼を露骨に排斥はしなかったものの、「静観」する態度に終始した。とりわけ、1942 年に巡ってきたハウプトマン 80 歳誕生祭に対するナチス政府の冷淡な態度は象徴的である。A. バルテルスは、体制側文芸評論家としてナチスに重用されていたが、その誕生年月日は奇しくもハウプトマンと全く同じであった。そこで政府は 1942 年 11 月 15 日にバルテルス 80 歳誕生祭を国家的行事として挙行したため、ほぼ故郷シュレジエンとその周辺のみで祝われたハウプトマンの誕生祭は、10 年前とは比較にならぬほど小規模な催しに留まったのである。講演及び挨拶の回数も、32 年の 28 回から 42 年は 5 回へと激減している。／ Vgl. C.F.W.Behl: Gerhart Hauptmann und der Nazismus. In: Berliner Hefte, Jg.2 (1947), S.489－497.／ 拙訳『ゲルハルト・ポール著、私はまだ家にいるのか—ゲルハルト・ハウプトマンの最期—』（鳥影社、1999 年）、解説参照。

[4] 演壇上でのハウプトマンは「自由」に話すことができず、常に前もって用意していた原稿を読み上げたことはよく知られている。その典型的なエピソードとして、ヒデンゼー島の牧師グスタフスが伝えるところによると、1924 年夏、当地のペンション„Haus am Meer"に逗留していたハウプトマンの上の部屋には、丁度トーマス・マンも滞在していた。そこに当時は各地を徒歩旅行していたワンダーフォーゲルの少年達がしばしば訪れ、作家達を讃え合唱したりしたのだが、するとハウプトマンは、慌てた風に秘書を呼び、5・6 行でも口述筆記させ、その原稿をバルコニーに出て下の少年達に向けおもむろに読み上げたという。その後マンが上のバルコニーに現れるわけだが、彼は軽妙な返礼の辞を滔々と少年達の頭上に降り注がせるのであった。これについてグスタフスは、「こうした現場を見るのは少し気まずいものだった。気まずいのは、とりわけそうしたことのあった後に、ハウプトマンはいつも若干のコンプレックスを感じていたからである。」と述懐している。／Arnold Gustavs : Gerhart Hauptmann und Hiddensee. Kleine Erinnerungen, Schwerin 1962, S.48-49.／ダイバーは、人前で自由に話せない「ハンディキャップ」が、ハウプトマンがトーマス・マンに対してある時以下のように切り出しながらも、結局„duzen"できなかった一因であろうと推測している。「では・・・よく聞いて下さいよ・・・よろしい！・・・私達は兄弟じゃありませんか、そうでしょう？・・・ですからこうすればいいんじゃないかと・・・確かに・・・でもまあこの位にしておきましょう！」／Hans Daiber : Gerhart Hauptmann. Oder der letzte Klassiker, Wien/ München/ Zürich 1971, S.203.／また、1912 年のノーベル賞受賞直前に受けたインタビューで、ハウプトマンは受賞式出席に関する不安として「受賞記念講演」を挙げ、「私は以前から公の場で人前に出ることに一種の恐怖を抱いている」と述べている。／ H. D. Tschörtner(Hrsg.) : Gespräche und Interviews mit Gerhart Hauptmann (1894-1946), Berlin 1994, S.54.

[5] Vgl. G. H.: Abschied von Oskar Loerke. In: Neue Rundschau, 52.Jg.(1941), S.129.

[6] Vgl. G. H.: Begrüßung Tristan Bernards.In:CA.X I , S.1047-1048.／ Zur Hochzeit Benvenuto Hauptmann mit Elisabeth Prinzessin zu Schaumburg-Lippe. In : a.a.O.,S.1071-1073.

[7] K.Hildebrandt / K.A.Kucyznski(Hrsg.): Weggefährten Gerhart Hauptmanns, Würzburg

2002, S.7-12.

[8] 1856年に25世帯269人の住人を数えるばかりのエルクナーは、ハウプトマン移住当時（1884年）には1100人にまで人口が増加していたが、それでも「自然と大地は私（筆者註：ハウプトマン）たちに途方も.なく生きる力を与えてくれた」（„Das Abenteuer meiner Jugend", CA.Ⅶ, S.1027）のである。この後エルクナーの衛星都市化は急速に進み、僅か7年後の1891年には2500人まで人口が増加する。／ Vgl. Bruno Fischer: Gerhart Hauptmann und Erkner. In: Zeitschrift für deutsche Philologie 81. Bd.(1962). S.440-472.

[9] G.H.: Das Abenteuer meiner Jugend. In: CA.Ⅶ, S.1040.

[10] a.a.O., S.1043.

[11] a.a.O., S.1041.

[12] Kurt Lothar Tank: Gerhart Hauptmann, Hamburg 1995, S.7.

[13] エルクナーに滞在したハウプトマンと、やや遅れて隣のフリードリヒスハーゲンで形成された文学者集団„Friedrichshagenerkreis"（FHK)とを同列に論じるケースがままあるが、両者の性格は全く異なっている。ハウプトマンは健康上の理由から止むなくエルクナーに移るわけだが、寒村での寂寥とした生活は時として彼の気を滅入らせもした。「ベルリンからここ（筆者註：エルクナー）への移住は、暴挙に近いものがあった。新たに始まる、ほとんど開拓ともいえるような生活様式がどれほど深刻であるかを知っていれば、こうした行動に出たかどうか疑わしいものである。」(G.H.: Lebenswende. In: Neue Rundschau 45.Jg.(1934), S.241.) エルクナーでは3人の子供も生まれ、家族の問題についても詩人は心を砕くことになる。つまり、一言でいえば、ハウプトマンにとってのエルクナー時代は、「深刻ではあるが実り多き時代」だったといえよう。それに対して、フリードリヒスハーゲンに集結した若手文学者達は、経済的不安を抱えてはいたものの、大半が気楽な単身者であり、思い思いに集っては気の済むまで文学談義を戦わせる当地の生活を、一種の文学的パラダイスと見なしていた。そうした感覚を代表する者がベルシェであるが(ベルシェはFHK中最も長く1918年までフリードリヒスハーゲンに住み続けた)、彼のフリードリヒスハーゲンを回想した文章と、ハウプトマンの主にエルクナー時代を語った文章„Lebenswende"(後、加筆訂正されて„Das Abenteuer meiner Jugend"に収録)とを比較すると、両者のそれぞれの土地に対する印象の違いは明らかである。先に引用したハウプトマンの文章と、以下に引くベルシェの文章を比較されたい。「あの時代全体を思い返すと、私にはむしろ、あの時代の上に、松の息吹や湖の息遣いと密かに混ざり合った、何か快楽の花びらが漂っていたかのような気がするのである。」(W.B.: Hinter der Weltstadt, Jena/Leipzig 1904, S.X.) ハウプトマンはフリードリヒスハーゲンの文学者達と一定の距離を置き、彼等の活発な文学論議にも進んで加わろうとはしなかった。しかし、ひとつの「夢の世界」に遊んでいた彼等に対して、エルクナーで人間存在の本質に直面し続けたハウプトマンの文学が、社会へのより深い洞察力と人間愛を備える結果となったのも頷けよう。

[14] Rudolf Lenz (1863-1938)。ロマニスト。ベルシェのギムナジウム時代の級友で、その後二人は離れるが、ボン大学、ベルリン時代と二度偶然に再会する。„Durch!"の集会へベルシェを招待し、親友となるヴィレを彼に引き合わせ、更にハウプトマンを紹介したレンツは、文字通りベルシェがベルリン文壇に馴染むまでの指南役を果たした。彼はギムナジウム教師を勤めた後チリに渡り、スペイン語文法研究分野で多大な業績を残した。／ Vgl. W.B.: Friedrichshagen in der Literatur. In : Ders.: Auf dem Menschenstern, Dresden 1909, S.245-259.

[15] Vgl. Helmut Richter: Theodor Fontane und Wilhelm Bölsche. In: Fontane-Blätter, Bd.5, H.5(1984), S.387-412.

[16] Vgl. Johannes J. Braakenburg: Nachwort der Herausgebers. In: W.B.: Die naturwissenschaftlichen Grundlagen der Poesie, Tübingen 1976, S.84-103, hier S.85.

[17] ベルシェは日記をつけていた。今に伝わっていれば、当時の文壇状況を記録した第一級の資料となったところだが、残念ながらその大部分(1874-1939)は紛失し、また彼が亡くなる直前

に綴った回想録も戦火で消失している。従って、ベルシェがベルリンに出てくる正確な時期さえ、1885年か86年か曖昧なままである。／ Vgl. Peter de Mendelssohn: S.Fischer und sein Verlag, Frankfurt a.M. 1970, S.1340.

[18] この書は、G. Th. フェヒナー（物理学者、哲学者。1801－1887）が先に著した „Vorschule der Ästhetik"の影響を受けているが、ベルシェは„Vorschule der Ästhetik"を、演繹法的形而上哲学の領域にあった美学を、帰納法的自然科学領域へ移行させた著作として高く評価していた。ただ、ベルシェの „Grundlagen der Poesie"は、「不死」や「愛」といった抽象的な概念について章が立てられているなど、彼が生涯追求した「新たな世界観の確立」という倫理的なテーマも扱っている。

[19] Vgl. Institut für Literatur-und Theaterwissenschaft zu Kiel (Hrsg.) : Verein Durch. Facsimile der Protokolle 1887, Kiel 1932, unter dem Datum 18.März u. 17.Juni.

[20] ベルシェが1891年を境に文学的創作から身を引いた点に関して、現存する資料から彼の心境的変化を窺い知ることは困難だが、外的要因として、同年の父カールの死去により経済的援助を受けられなくなったことが挙げられる。家族を抱えたベルシェは、時流に即した「売れる文章」を書く必要に迫られ、それが彼をして自然科学啓蒙書に手を染めさせる一因となったことは否定出来まい。事実、彼は成功した啓蒙書に大幅な加筆訂正を加え再発行することにより、著作の部数の増加と発行期間の延長を図っている。／ Vgl. Bibliographie der Schriften von Wilhelm Bölsche. In: Anm.15, S.100-103.

[21] Bruno Wille: Erinnerung an Gerhart Hauptmann und seine Dichtergeneration. In: Walter Heynen(Hrsg.): Mit Gerhart Hauptmann. Erinnerungen und Bekenntnisse aus seinem Freundeskreis, Berlin 1922, S83-116, hier S.90.

[22] a.a.O.,S.98. ／„Durch!"初訪問の場面をベルシェも同様に回想しているが、ヴィレは「自分一人」がベルシェを„Durch!"に連れて行った、としているのに対し、ベルシェは、レンツとヴィレに案内された、と記している点が興味深い。レンツはヴィレ（彼はやはり大学時代のレンツの友人だった）にとってよりもベルシェにとってより大きな存在であったことが偲ばれる。ベルシェの以下のことばはそれを裏付けるものだろう「それまで（筆者註：ハウプトマンと出会うまで）私の軌跡はレンツをなぞっていた。この時からそれは独自の線を描いてゆくのである。」(B.W.: Friedrichshagen in der Literatur. In: Ders: Auf dem Menschenstern, Jena/Leipzig 1904, S.249.)

[23] a.a.O.,S.248.

[24] Vgl. Behl / Voigt: Chronik von Gerhart Hauptmanns Leben und Schaffen, S.25ff.

[25] Vgl.G.H.: Lebenswende, S.253. （尚、この文献中でハウプトマンはハンブルク滞在を87年1月からとしているが、実際には86年11月からが正しい。）

[26] この時期を語った唯一のハウプトマン側からの証言は、„Das Abenteuer meiner Jugend"であるが、この自伝はプライベートな内容に終始しており、文学遍歴を語った中でも、„Moderne Dichter-Charaktere"の鮮烈な印象は克明に語られているが、„Durch!"についてはごく手短にしか触れられておらず、ましてやベルシェやヴィレについては言及もされていない。／ Vgl. CA.VII, S.1055.

[27] 「1889.4.10.(水)。ベルシェとヴィレに私のイエス論文を読み聞かせた。」(G.H.: Notiz -Kalender 1889-1891[hrsg.v. Martin Machatzke], Frankfurt a.M./Berlin/Wien 1982, S.35.)

[28] ヴィレは以下のように回想している。「あれは夏も盛りの頃だったが、トショウ（Wacholder）の繁みの中で、ゲルハルトが私とベルシェの横に座り、丁度出来上がったばかりの戯曲『日の出前』を読んでくれたことがあった。この作品に私たちは魅了され、私は、題名である白みゆく朝が倫理的文化やまた文学にとって重要な新時代を意味するかのような印象を受けたのだった。」(B.W.: Erinnerung an Gerhart Hauptmann. S.106.)

[29] a.a.O. S105

[30] „Vor Sonnenaufgang"は、1889年10月20日に„Freie Bühne"第2回例会の場で初演されたが、それ以前の同年8月には約80人に作者自らの手によって謹呈されている。その内

„Durch!"のメンバーとしては、ホルツ(1)、シュラーフ(2)、H. ハルト(50)、J. ハルト(51)、ヴィレ(52)、ベルシェ(53)、L. ベルク(54)、O. ヴォルフ(55)等に作品が郵送された（括弧内の数字はハウプトマンによる郵送順のナンバリング)。初演前の論評としては、ブラームが9月に„Nation"誌上に発表したものが嚆矢といえるが、この文章は多分に作品の事前PRの意味も兼ねていた。／ Vgl. Otto Brahm: Ein deutscher Naturalist. In: Nation. Jg.6, Nr.50 (14.9.1889), S.749-750.／他にもF. シモン(1862－1912：ハウプトマンの学生時代からの友人で医学者、婦人解放運動家)やK. ブライプトロイやP. シュレンターやフォンターネといった作品の献本を受けた面々が初演と前後して雑誌や新聞に短い論評を発表しているが、ベルシェのそれは数ページに亘る本格的なもので、主人公ロートの造形に苦言を呈するなど、同時期では他の論評に見られない踏み込んだ分析を展開している。／ Vgl.W.B.: Ein deutscher realistischer Drama. In: Gegenwart. Jg.18, Bd.36, Nr.41(12.10.1889), 234-236.

31 Vgl. W.B.: Gerhart Hauptmann. In: Moderne Dichtung, Jg.1, Bd.2, H.1, Nr.7(1890), S.421-423.

32 Vgl. Norbert Honsza/Karol Koczy: Gerhart Hauptmann an Wilhelm Bölsche. In: Weimarer Beiträge, 1965, H.4, S.590-603, hier S.591.

33 「ベルシェとその妻、シルベル氏(日記の編者であるMachatzkeは、Max Schippel [1859-1928:ジャーナリスト。後の社会民主党国会議員]の誤りではないかと類推している)、マーシャルクとその妹。」(G.H.: Notiz-Kalender, S.160.)

34 Honsza/Koczy: Gerhart Hauptmann an Wilhelm Bölsche. S.593.

35 Vgl. Behl / Voigt: Chronik von Gerhart Hauptmanns Leben und Schaffen, S.41.

36 Vgl. Anm.33.

37 B.W.: Friedrichshagen in der Literatur, S.250-251.

38 ベルシェとヴィレがフリードリヒスハーゲンに転居した正確な期日は不明である。Braakenburgは1888年としているが（Braakenburg: Nachwort der Herausgebers. In: W.B.: Die naturwissenschaftlichen Grundlagen der Poesie,S.93.)その根拠は、1901年に発行されたベルシェのエッセイ集„Hinter der Weltstadt"の序文に「この夏で丁度13年経つ」（W.B.: Hinter der Weltstadt, Jena/Leipzig 1904, S.V.）とあるからであろう。だがそれはベルシェが都会に嫌悪を感じ出してからの年数であり、その後暫く葛藤が続くのである。Langは「1890年春」とし、Burghartは「1890年7月末」とするが、両者の記述はベルシェとヴィレの転居後の住所も一致し(ベルシェ：Scharnweberstraße 73、ヴィレ：Kurze Straße 8)、信頼性が高い。(Vgl.Rolf Lang: Wilhelm Bölsche und Friedrichshagen[Frankfurter Buntbücher 6], Frankfurt a.O. 1992, S.4. ／ Albert Burkhardt: Der junge Gerhart Hauptmann und die Friedrichshagener[Friedrichshagener Hefte Nr.8], Berlin/ Friedrichshagen 1996, S.53.) Gunthernによると、ベルシェは転居当初Kampfmeyer (1864-1945:社会主義者、編集者。後にベルシェ、ヴィレと共に„Freie Volksbühne"を設立)の許に暮らしていたとある(Vgl.Katharina Günther: Literarische Gruppenbildung im Berliner Naturalismus. Bonn 1972, S.123.)。この記述を信じると、Burghardtはベルシェが自宅に入居した時期を記した可能性が高い。

39 フリードリヒスハーゲンに出入りした文学者・芸術家達については、特に以下の資料に詳しい。／ Wilhelm Spohr (hrsg.): O ihr Tage von Friedrichshagen, Berlin 1949. ／ ただ、当地に住居を構えた者はごく僅かであった。「ゲルハルト・ハウプトマンを筆頭に、或る日自然主義作家の集団が大挙してフリードリヒスハーゲンに移住した、などという噴飯ものの作り話が後世には第三者の間で生まれたが、実のところ、生き生きとしたあの日々には、ブルーノ・ヴィレとハルト兄弟と私（全員この地の住人）だけが親密なサークルを作っていたのだ。」(W.B.: Hinter der Weltstadt, S.X.)

40 「1890.7.6.(日)フリードリヒスハーゲンの森林小屋へピクニックに行った。（中略）ハルト兄弟は一行の道化者。（中略）ベルシェやヴィレたちは善良で立派な人間だ。このハルト兄弟

というのは怠け者で死んだも同然である。彼らからは退廃的な印象を受ける。」(G.H.: Notiz-Kalender 1889-1891, S.275-276.)

41 Vgl. Adalbert von Hanstein: Das jüngste Deutschland. Zwei Jahrzehnte miterlebten Litteraturgeschichte, Leipzig 1901, S.188.

42 FVB及びNFVBはFBの如き正式な機関雑誌を持たなかったが(NFVBには小規模なものが存在した)、例会の報告等は雑誌„Freie Bühne"に掲載された。従って、FBとFVB/NFVBは、決してライバル視し合う団体ではない。そもそも、ブラームもFVBの幹事として設立総会に出席している。この三団体がライバル視した団体は、むしろミュンヘン自然主義グループに属していたK.アルベルティとC.ブライプトロイが主宰した„Deutsche Bühne"(例会は6回のみ)である。従って、FVB/NFVBの変遷は„Freie Bühne"で辿ることができるが、FVB分裂の経緯についてはJ.Hartの以下の文章に詳しい。／ Julius Hart: Der Streit um die „Freie Volksbühne". In: Freie Bühne für den Entwicklungskampf der Zeit, Jg.3(1892), S.1226-1229.

43 Vgl. Günther: Literarische Gruppenbildung im Berliner Naturalismus, S.102-122.

44 W.B.: Friedrichshagen in der Literatur, S.256.

45 拙著:「フィードゥスの„Lichtgebet"」(好村冨士彦教授退官記念論文集、平成7年、65－74ページ)参照。

46 Vgl. G.H.: Tagebücher 1906-1913(Nach Vorarbeiten v. Martin Machatzke hrsg.v. Peter Sprengel), Frankfurt a.M./Berlin 1994, S.288 / 291.

47 Vgl. Honsza/Koczy: Gerhart Hauptmann an Wilhelm Bölsche, S.596-603.

48 「アグネーテンドルフ、1936年6月25日。昨夜はヴィルヘルム・ベルシェがヴィーゼンシュタインを訪れた。広間の暖炉で梨の木の薪がぱちぱちと燃える側に座り、楽しげにも真剣に語り合った若き日の思い出話は尽きることがなかった。フリードリヒスハーゲンの日々が再び甦った。」(C.F.W. Behl: Zwiesprache mit Gerhart Hauptmann, München 1948, S.39.)

49 Honsza/Koczy: S.591.

50 B.W.: Altes und Neues über Gerhart Hauptmann. In: Hinter der Weltstadt, 88-113, hier S.100-113.

51 1880年代に地方からベルリンに出てきた文学青年達は一様に貧しく、そうした様子をJ.ハルトは後年以下の文章で回想している。／ J.Hart: Mein erster Winter in Berlin. In: Velhagen und Klasings Monatshefte, 33.Jg., 1.Bd.(1918/19), S.65-71.

52 Vgl. Günther: Literarische Gruppenbildung im Berliner Naturalismus, S.23-49.

53 Vgl. G.H.: Zum Austritt Deutschlands aus der Völkerbund. CA.XI, S.1133.-1134. / Für den Anschluß Österreichs(II), a.a.O., S.1158.

54 ハウプトマン60歳誕生記念祭における講演で、マンは詩人に向かって以下の如き最上級の賛辞を贈っている。「誰が否定することでしょう。今日あなたは王なのです。私の前に座る姿そのままに、まさしく民衆の王－共和国の王なのです。」(Th. Mann: Von Deutscher Republik. In: Ders.: Gesammelte Werke 3, Oldenburg 1960, S.812.)

55 Peter Sprengel: Anmerkungen des Herausgebers. In: G.H.: Tagebücher 1914-1918, Berlin 1997. S.280.

56 ベルシェが晩年行った講演では、自然の進化法則が理想的に発現した例として、ルターやゲーテやフリードリヒ大王と並んでヒトラーも挙げられたことが報告されている。／ Dieter Kafitz: Tendenzen der Naturalismus-Forschung und Überlegung zu einer Neubestimmung des Naturalismus-Begriffs. In: Der Deutschunterricht. 40.Jg., 2.H.(1988), S.11-29, hier S.26ff.

57 Vgl. W.B.: Vom alten Fontane. In: Ders.: Hinter der Weltstadt, S.37-49, hier S.39ff.

58 CA. VI(Anm.1), S.817.

59 G.H.: Tagebücher 1914-1918, S.395.

Wilhelm Bölsche und Gerhart Hauptmann

Masafumi SUZUKI

Wilhelm Bölsche(1861—1939), einer der engsten Freund Gerhart Hauptmanns, ist der erste Schriftsteller in Deutschland, der durch seine Aufklärungsschriften über Naturwissenschaft große Popularität erlangte. Unter den zahlreichen Freunden und Zeitgenossen Hauptmanns, von Politikern bis Journalisten, nimmt Bölsche eine besondere Stellung ein. Der Dramatiker und Bölsche trafen vermutlich im Jahre 1886 aufeinander, als Hauptmann noch in Erkner, einem Vorort östlich von Berlin wohnte. Damals hatte er noch keine nennenswerte Werke veröffentlicht. Bölsche war ebenfalls ein unbeschriebenes Blatt zu der Zeit. Ihre Freundschaft nahm im Jugendalter Hauptmanns ihren Anfang und war, im Vergleich zu den Bekanntschaften, die der Dramatiker später mit vielen prominenten Personen schloss, naiv und schlicht, was sich bis zum Ende nicht ändern sollte. Als ein denkbarer Grund für ihre lebenslange Verbindung läßt sich die ähnliche Situation in verschiedenen Lebensabschnitten anführen. Zu denken ist dabei als erstes an die finanzielle Lage beider in der Zeit vor den erfolgreichen literarischen Auftritten. Bölsche wurde vor allem von seinem Vater, der als Redakteur der „Kölnischer Zeitung" einen Kreis von Geistes- und Naturwissenschaftlern um sich herum bildete, bis zu dessen Tod finanziell unterstützt, während Hauptmann vor seinem sensationellen Debut von dem Vermögen seiner Frau lebte. Dies machte es Hauptmann und Bölsche auch möglich, in Italien zu studieren. Dieser Aufenthalt beeinflußte nachhaltig ihr Schaffen, sie schrieben die epigonenhaften Studien „Paulus" (Bölsch) und „Promethidenlos" (Hauptmann). Weitere Parallelen zwischen beiden Persönlichkeiten bestehen dahingehend, dass sie fast zur gleichen Zeit bemerkenswerte Werke veröffentlichten, die ihnen weltweite Anerkennung als vielversprechende Schriftsteller einbrachten (Bölsch: „Die wissenschaftlichen Grundlagen der Poesie"1887, Hauptmann: „Bahnwärter Thiel" 1888). Zudem gehörten Hauptmann und Bölsche in dieser Zeit gemeinsam den drei bedeutenden naturalistischen Gruppen, Verein „Durch!", „Friedrichshagener Dichterkreis" und „Freie Bühne" an. Man könnte also sagen, dass Bölsche und Hauptmann eine ähnliche literarische Wanderung bis zu ihren Debuts erlebten. Aber auch in späteren Jahren, in der Nazi-Zeit, läßt sich eine ähnliche Haltung zwischen beiden Schriftstellern beobachten. Noch heute diskutiert man Hauptmanns Verhalten gegenüber dem Nazi-Regime. Er gab sowohl dem Austritt Deutschlands aus dem Völkerbund als auch dem Anschluß Österreichs seine Zustimmung, und trat selbst nicht aus der „Preußischen Akademie der Kunst" aus, während er mit seinen Werken wie „Die Finsternisse" oder „Atriden-Tetralogie" seinem Pazifismus und Antifaschismus Ausdruck verlieh. Bölsche als Anhänger des Darwinismus gehörte der „Deutschen Gesellschaft für Rassenhygiene" an, die den Darwinismus für die Rassenpolitik verdrehte, und stimmte der Grundidee des Nationalsozialismus zu. In seinen Schriften allerdings bezieht er einen ablehnenden Standpunkt gegenüber Nationalismus und Heroismus. Insgesamt läßt sich sagen, dass die gemeinsame anfängliche Karriere Hauptmanns und Bölsches und ihre spätere politisch heikle Lage zu ihrer starken, unveränderlichen und stillen Freundschaft nicht unwesentlich beigetragen haben.